

タイトル:平成 28(2016)年度 教育セミナー(第 12 回)

日時:2016 年 9 月 18 日(日)~21 日(水)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

「マムルーク朝エジプトにおける貧困と慈善 ― ワクフ現象の捉え方」

久保 亮輔 (一橋大学大学院経済学研究科)

昨年に引き続き、今年も中東☆イスラーム教育セミナーに参加をさせていただきました。今年は修士論文執筆を予定している年ということもあり、ただ参加するだけではなく、発表もし、そこで得られた指摘・助言をもとに本格的に論文執筆を開始しようという意気込みで参加を決めました。

ただ、実際に参加し発表をしてみると、自分の研究が遅々として進んでいないのを痛感する結果となりました。他の発表者は具体的に自身の関心に沿ったリサーチクエスチョンを設定し、史資料に基づいた実証的な研究を進めているのにたいし、私はというと、史料の蒐集こそすれ、それを丹念に読み込み実際に研究に用いるというプロセスがまったくできておらず、発表後の質疑応答の時間に交わされた問答はおよそ問題設定の甘さと史料の読み込みの欠如に収斂されるものでした。大変恥ずかしい思いをすると同時に、せつかくこのような「舞台」を用意してくださったアジア・アフリカ言語文化研究所の先生方とスタッフの皆さまに顔もむけられない程の悔悟の念を覚えました。発表翌日には、心身共に疲弊しきってセミナーを欠席してしまうほどでした。しかし私が今後すべきことはよくよすることではなく、今回の発表で味わった屈辱を糧に「論文を執筆すること」だと悟り、いまは日々史料の読み込みに耽っています。

私が欠席した翌日、心配して優しく声を掛けてくださった先生がた、それからスタッフの皆さま、同志の受講生たちには、心から感謝しております。その寛仁なお取り計らいに、どれだけ救われたか計り知れません。その他、K 先生にはセミナー後も折に触れて懇ろなご指導をしていただきました。そのご温情にたいしては、ただただ感謝の言葉しかありません。T 先生には、今年も叱責と励ましの言葉をいただきました。特に、発表時の姿勢について、「僕たち(聴衆)は、化粧をして着飾ったきみ(発表者)をみたいんだ」といって私を諭してくださったのが印象的でした。関西からわざわざ足をお運びいただいた N 先生からは、研究発表をする学会の選び方や各学会の独特な性質など、日常の研究のみならずそれを公に発表する際の留意点などをご示教いただきました。いずれのご助言も、セミナーに参加しなければ決して得ることのできなかつた「金言」で、日々の研究生活、それから学外での研究発表の際には、常に座右に置いておきたいと思います。

最後に、今回私のような未熟な学徒にも発表の機会を与えてくださった関係者の皆さまに、敬意と感謝の念を表したいと思います。私のような不躰な学徒であっても、決して無碍に扱うことなく、「ズインミー」として格別のご高配を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。何にも替えがたい経験となりました。